

と記されており、用具の改良に積極的姿勢を示していることや、西洋の絵具や粘土も大いに使用する計画であったことがわかる。

四 予 算

予算については「計画案(2)予算案」に第一年度総計費六万円、第二年度十万円、第三年度十五万円（以上は人件費を除いた額）と記されている。実際の東京美術学校予算（卷末経費表参照）とは比較にならない高額の予算案を立てていたことがわかる。

五 組 織

組織については断片的な記述が残っているのみで全体的な構図は把握できないが、画院ないしは美術局、アカデミーとの関連において美術学校組織をかたちづくろうとしていたと考えられる。

第二回鑑画会大会

図画取調掛が発足して美術学校設立準備が始められて間もなく、明治十九年四月十五日から十八日までの四日間、フェノロサらは第二回鑑画会大会を開催した。主な出品者は次のとおりであった。

一等賞（五十円） 狩野芳崖「二王の図」
二等賞（二十円） 橋本雅邦「弁天の図」

渡辺省亭「月夜の杉」

三等賞（十円） 欠
四等賞（五円） 高橋応真「芥子花」

その他出品者 狩野友信、端館紫川、木村立嶽、前田錦楓、瀧村弘方、狩野勝玉、三島蕉窓、本多佑輔、岡倉秋水、岡又太郎、山

内綾岡、鈴木華村等々。

前回および今回の大会の出品者の中にはのちに東京美術学校絵画科の教師となる狩野芳崖、橋本雅邦、狩野友信、結城正明や生徒となる岡倉秋水、本多佑輔（天城）、岡又太郎（不崩）らが名を連ねており、既に鑑画会において絵画科の原形のようなものができていたことがわかる。

今大会の開催は、一つには東洋絵画会の共進会に対する批判の意図も持っていた。東洋絵画会というのは龍池会から派生した団体で、この十九年春には大規模な日本画の公募展を上野公園で開催していた。会場の様子を『東洋絵画叢誌』第十六集（明治十九年六月三十日）は次のように伝えている。

館の中央を第一区とし土佐住吉光琳巨勢派の畫を陳列し其左背を第二区とし狩野英長谷川の畫を陳列し第三区ハ南宗北宗南北合派南蘋文晁等の派にして出品殊に多く殆ど場中三分の二を領せしを以て第一第二区を繞りて二區の環を畫して猶餘りあり其次を第四区とし圓山四條鈴木原望月容齋諸派の畫を陳列せり第五区ハ麥川宮川歌川派の畫を陳列し第六区ハ自ら無流派と稱せし畫を陳列し此外に審査を請ハざるの畫及京都畫學校教員生徒の畫南北（漢畫）東（圓山四條）西（洋畫）の四派の合作其他を番外として之を陳列し新畫茲に終れり其出品人ハ千六百人畫帖ハ三千貳百張なり場の最終の一部を參考畫室とす畏くも御物を殆めとし皇族方の御藏幅文部省博物館等の御備品より華族以下諸家の珍藏秘笈を出陳し一週間毎に之を掛替へ諸家の參考

に供へたり

同会では流派別に出品が行われ、第一区は山名貫義、川辺御楯が、第二区は狩野永恵、狩野昭信が、第三区は渡辺小華、大庭学僊、吉澤雪庵、菅原白龍が、第四区は川端玉章、松本楓湖、村瀬玉田が審査し、川辺御楯、児玉果亭、木村雅経、瀧和亭、田崎草雲、森琴石、池田雲樵、川端玉章、村瀬玉田、鈴木百僊、柴田是真が銀印を、鬼頭玉三郎、田中茂一、中野其明、片山尚彦、川辺白鶴ほか二十七人が銅印を、山名繁二郎ほか二百九十一人が褒状を授与されている。このように規模こそ大きかったが、この共進会は前二回の内国絵画共進会を民営（農商務省の補助のもとに）に移したただけのもので、特に新味もなく、内容は散漫であった。

鑑画会の一員である岡倉覚三は「東洋絵画共進会批評」（『東京日日新聞』明治十九年四月十四、十五日）でこの共進会のあり方を強く批判した。彼は先ず出品の性質を精察した上での感触として、

- 第一 前二回の繪畫共進會に劣ることはなり
- 第二 改良進歩の原素なきことはなり
- 第三 出品を精査せざることはなり
- 第四 宗派を區別する幣是なり
- 第五 疎密大小を制限するの害是なり
- 第六 陳列其法を得ざることはなり

と欠点をあげ、各項目について論じているが、第一については当局者に進歩改良の意志がないことに原因があるとし、「我輩の日本畫家に向て切望する所のものハ先づ美術防害者の壓制束縛を脱離し從

來審査の習氣如何を窺はず自から其名譽を保維するに在り」と述べ、暗に審査員が愚昧卑屈にして美術の防害者となっていることを非難している。第二については当局者が美術開發の方針、方法を持たず、特に新機軸の開發を奨励しないことに原因があるとし、出品画を次のように厳しく批判している。

蓋し出品畫幅中過半ハ古畫に摸擬し或ハ古人の圖を其儘に臨寫し或ハ古畫を合併分離し或ハ其圖様に微細の變更をなし或ハ雪舟の前景に梁階の樹木を添へ或ハ文晁の山水に探幽の人物を加へ古畫の幽魂千變萬化して可笑の可憫的配合をなせり真に畫家の脳髓に起り其心を筆したるものハ寥々晨星の如し然るに同會規則中にハ古畫を摸寫するを禁じたれば同會の見る所にてハ是等ハ古人の意匠を剽竊摸擬したるものも古畫の摸寫に非ずと云ハハ繪畫改良の目的豈夫れ達すべけんや如何に筆力が自在なるにもせよ如何に着色が精巧なるにもせよ畫家の精心に基かずして古人の意匠に摸擬したるものは盡く死物たるを免かれず呼此の如き畫の一枚にても共進會場に在らん限りハ同會ハ發達の望なきものなり

第三については美術会というものは作品の優劣を精査し惡画拙筆を排し、会の名譽品位を保つべきことを論じ、第四、第五については画家の精神を檢束し自由を妨害してはならないことを論じ、第六については作品の優劣の順序に應じ、光線の具合を考慮して注意深く配置すべきことを論じている。

第二回鑑画会大会はこのような東洋絵画会共進会の欠点に対する批判をふまえて開催されたと考えられる。諸新聞の評は概ね好意的で、その一つ、『東京日日新聞』（明治十九年四月十六日）は次のように報じている。

○鑑畫大會 昨十五日の午後より池の端松源及び蓬萊亭にて豫記の鑑畫大會を開きたり此うち松源にハ今回の出品を陳列し蓬萊亭にハ是まで同會に於て審査を経たる畫幅を陳列す其の列品中尤も目覺しきハ（松源方）の狩野芳崖氏の二王、橋本雅邦氏の辨天、同雪景山水の屏風、同山水小幅、渡邊省亭氏の墨畫月夜杉、前田錦帆マユ氏の花鳥、狩野友信氏の鷲、木村立嶽氏の山水屏風、端館紫川氏の山水（蓬萊亭の方）狩野芳崖氏の双龍、維摩居士、橋本雅邦氏の山水數幅、鮮齋永濯氏の不動（此ハ第一回大會に一等賞を得たるもの）等なり其外の列品巧拙精粗ハさまじくなれども何れも出品者の精神の籠りたるものにハ相違なし又た同會へ出品の爲め府下及地方より達したる畫幅ハ無慮三百幅に及びたる由なるが其内古人の圖畫を摸擬し又ハ輕卒にして改良の兆候なきものハ同會批評委員に於て之を謝絶し昨日松源蓬萊亭に陳列したるハ百數十枚なりし其謝絶品中にハ隨分有名の畫家銀印銅印先生達の畫もありし由なり又た伊藤總理大臣にも去る十三日同會に臨まれて委しく出品を賞鑒せられたりと聞く

大会開會中の四月十八日、フェノロサは多くの聴衆を前に例によ

って講演を行った。『中外電報』（同月二十二日）、『東京日日新聞』（同月二十三、二十四日）、『大日本美術新報』第三十号（同年四月）、同第三十一号（同五月）に訳載されている。フェノロサはまず従来の講演で説いてきた美術發達の条件に関する自説を要訳して述べ、次いで美術進歩の方策を論じ、最後に出品画の批評を行った。特に美術進歩の方策については、

- 第一 本邦古来の宗派に由り再び純清を求むるにあり
- 第二 外國の教育法を實行するにあり
- 第三 自家發達の主義に因り進歩を謀るにあり

（前出『東京日日新聞』記事による。）

の三項を掲げ、第一、第二の採るべからざる理由を述べ、第三こそ有益であるとし、日本画法を保存し美術上必用な理學教育を加えることにより日本美術の自力的發達を促進することこそ最良の方策であつて、それが鑑画会の方針であると説いている。これに加えて鑑画会のような小さい組織ではなく、公的な美術教育を実施することが必要であるとも説いているが、その点は図画取調掛設置以後具体性を帯びてきた美術学校設立の動きを考慮したためと考えられる。

なお、この大会で注目すべきことは、四月十三日に総理大臣伊藤博文が内覧に訪れたことである（前出四月十六日付『東京日日新聞』記事参照）。これ以後のフェノロサ、岡倉らの活動はこの伊藤のバックアップを少なからず受けたようであるが、フェノロサは伊藤との提携について次のように記している。

一八八六年初め、伊藤伯爵は岡倉氏と私にはじめて、もっと有

効な美術館及び日本の美術産業発展のための計画を打明けられました。この問題は宮内省の会議で討議され、私は美術教育が当計画の一部をなすものとして、文部省管轄下に検討されるべきである、と提案しました。外国美術の導入については、何も問題になりませんでした。この計画は日本美術を内から発展させるためのものであることを、誰もがはっきりと了解していました。一八八六年四月、光栄にも伊藤伯と大多数の閣僚諸卿が上野で開かれた我々鑑画会の展覧会を見に来られ、日本画の真に活気ある発展の開始に満足の意を表されました。この展覧会では三年間にわたる努力の成果が発表され、諸卿はこの進歩が講演と指導による私の個人的な方法の賜物であることをはっきり了解した、とっておられました。

(森有礼宛フェノロサ書簡草稿部分。村形明子編『フェノロサ資料 Ⅰ』(一二五頁))

また、これは芳崖の逸話の一つであるが、伊藤博文がフェノロサらを支援するようになったのは芳崖の作品や意見に感服した結果であるとする話が伝わっている。つまり、伊藤はこの第二回大会で「二王の図」(仁王捉鬼図)を見るに及んでそれまでの日本画軽視の態度を改め、芳崖に絵を依頼した。それを快諾した芳崖は「大鷲」(本学蔵)の制作に取り組み、また、一方ではこのときとばかり伊藤を訪れ、美術論を開陳し、それらが効を奏して伊藤が彼らの活動を援助することになり、その結果、美術学校設立等が実現したというのである。この話は河瀬秀治談「美術界の今昔」(『日本美術』

第八十号。明治三十八年十月)あたりが初出らしく、全てを芳崖の効に帰せしめている点で余りにも講談めいているが、しかし、芳崖が「大鷲」制作当時に岡不崩に出した手紙(岡不崩著『志のぶ草』明治四十三年十二月。日英舎)を見ると、芳崖の伊藤を説得しようとする決意のほどが察せられ、伊藤もあるいはそれに動かされるようなことがあったのかも知れないと思われる。

明治十九年の古社寺調査

明治十九年四月から六月にかけて、図画取調掛では岡倉覚三、フェノロサ、藤田文蔵、狩野芳崖ら四名の掛員が奈良地方古社寺の宝物調査に出張した。この調査は前回明治十七年の調査の実績をふまえてさらに調査を完全ならしめるためのものであった。岡倉らの派遣については、『文部省第十四年報』には

明治十九年四月十三日 本邦美術品取調ノ為メニ文部属岡倉覚三及ヒ雇藤田文蔵ニ大阪府下奈良地方出張ヲ命シ廿三日更ニ狩野芳崖ニ同地出張ヲ命ス

と記されている。フェノロサの名は記されていないが、もとより彼も、加藤直景(図画取調掛の小使であったといわれる。)を連れて同行した。藤田文蔵と狩野芳崖が調査に加わったのは、将来美術学校で開始する国風美術教育の基礎となる古美術研究を行うためであったと考えられる。ちなみに岡倉は東京美術学校開校後、新任の教師を奈